

用心棒 もつらいよ

冒険者

用心棒

冒険者 「いやあ、もうすぐだな、クルム鉱山。この道をずっとまっ

すぐだっけか？」

用心棒 「・・・そうだな。」

冒険者 「なんだ？ これからいつちよ大捕り物かまそうって時に、
用心棒サマがそんなんじゃ、調子狂っちゃまうぜ。」

用心棒 「ふん、楽しそうだな。」

冒険者 「おうともよ！ なんとたつて国のお墨付きの仕事だからな。

報酬もタンマリだしな！」

用心棒 「金か。そんなに金が欲しいのか。」

冒険者 「なんだよ、んなもんあたりまえじゃねえか！ 金さえあれば、好きなことがなんだってできちまうんだぜ？ あつて

困ることなんかねえだろうがよ！」

用心棒 「お前は気楽でいいな。その能天気さ、少し分けて欲しいものだ。」

冒険者 「おうおう、分けられるもんなら分けてやるぜ！ そんなもんよりした空気なんて出されたら、こっちまで暗くなっちゃうぜ。」

用心棒 「一応聞くが、今回のターゲットの情報はすべて把握してるか？」

冒険者 「もちろんよ！　なんかアヤシイ儀式をやらうとしてるってヤツだろ？」

用心棒 「・・・それだけか？」

冒険者 「お、おう・・・悪いかよ。」

用心棒 「はあ・・・頼むから、もう少し危機感を持ってくれないか。」

冒険者 「あん？　大丈夫だって！　それこそ用心棒サマのチカラで、チヨチヨイとやってくれんだろ？」

用心棒 「そんな甘いものではない。まったく、国はなんでこんな輩に依頼したのか・・・」

冒険者 「言ってくれるじゃねえか。俺だって、やるときやるんだぜ。」

用心棒 「いいかよく聞け。そんな甘い考えだと・・・お前、死ぬぞ。」
冒険者 「え？　俺が？　はっはっはっは！　ないない、それだけはない！」

用心棒 「どこからそんな自信が湧いてくるんだ？」

冒険者 「だって俺、今まで死んだことないしよ。次も絶対大丈夫だって！」

用心棒 「・・・こいつは紛れもない、正真正銘の阿呆だ。う、胃がキリキリする・・・」